

武道の捉え方

－主に柔道の視点から－

宇都宮奈美^{*}, 下川美佳^{**}, 中村勇^{**}, 濱田初幸^{**}, 前阪茂樹^{**}

Interpretation of Budo

- from the viewpoint of Judo -

Nami UTSUNOMIYA^{*}, Mika SHIMOKAWA^{**}, Isamu NAKAMURA^{**},
Hatsuyuki HAMADA^{**}, Shigeki MAESAKA^{**}

Abstract

“Bushido spirit” has recently become a boom in Japan and worldwide. The amendment to the Fundamental Law of Education passed in May 2006 designated respect for tradition and culture as an educational goal. Bushido spirit has somehow managed to garner attention in today’s world, long after the days of the samurai. Herein, we examine and elucidate the characteristics of Budo, which were crucial in shaping the Bushido spirit.

Judo is currently the most internationalized form of Budo. As it spread, Judo underwent various changes. A concern regarding the internationalization of Judo is that only the rules of Judo have spread, without sufficient consideration for its educational value. The principles of most Budo include character formation, which is an intrinsic component of Budo. Proper dissemination of these intrinsic components of Budo is of utmost importance in the internationalization of Judo. In addition, the Japanese people themselves must reconsider the meaning of Bushido spirit. In the Judo world, a project called “Judo Renaissance” is currently being implemented to return to the fundamentals of Judo while focusing on human education. Other Budo should also follow a similar course and be carefully internationalized and promoted as sports.

KEY WORDS : Budo, Bushido spirit, internationalization of Budo

I. 緒言

ここ数年で、日本では「武士道精神」がブームである。最近世界で注目されるようになり、逆輸入の形でブームが巻き起こった。

まず2003年、映画「ラストサムライ (THE LAST SAMURAI)」が公開された。この映画は武士道精神を描いた作品である。日本とアメリカの合作であるこの作品は、空前のヒットとなった。

そして昨夏、サッカー世界大会である「2006

FIFA WORLD CUP」がドイツにて行われた。出場したジーコジャパンの応援キャッチフレーズもまた「サムライブルー」というものであった。

また2006年5月には教育基本法改正案が出され、2006年12月、文部科学省は教育の目標の一つとして、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。」⁷⁾という項目を新しく挙げた。この中の伝統と文化の一つに武道が当てはまると考えられ

^{*}鹿屋体育大学大学院体育学研究科

^{**}鹿屋体育大学伝統武道・スポーツ文化系

る。

ではこの武士のいなくなった現世で、武士道精神が注目されようとしているのはなぜなのだろうか。武士道精神を形成してきた日本武道を概観し、その特徴を探ってみることとする。

II. 研究方法

本研究では、武道の捉え方、つまり武道に関する様々な視点について、主に柔道を中心にしながらテーマを絞り、武道全般について考察していく。

III. 結果および考察

1. 武道の理念と国際化の現状

現在一般的に武道と呼ばれているものには、柔道、剣道、空手道、少林寺拳法、相撲、なぎなた、弓道などがある。これらの武道はそれぞれの理由で世界に進出し、現在もなお進化している。以下の表1～7は、各武道団体についてまとめたもの

表1 柔道団体について

国内連盟設立年数 ^{*1}	全日本柔道連盟1949年設立
国際連盟設立年数 ^{*2}	国際柔道連盟 (IJF = International Judo Federation) 1952年設立
国際連盟加盟国数 ^{*3}	199ヶ国
国際スポーツ団体総連合加盟の有無 ^{*4}	加盟
団体理念等 ^{*5}	理念: 「精力善用・自他共栄」柔道とは単なる攻防に応用する心身の力の最有効使用法だけでなく、広くいかなる事柄にも応用できる、心身の力を最も有効に使用する道の名称である。柔道の終局の目的は己を完成し世を補益することである。

表1 資料出所: ^{*1, 2}は杉山 (2002), ^{*3}は講道館 (2007), ^{*4}は GAISEF 公式ホームページ「Members」, ^{*5}は山口ら (2002) を参考にして筆者が作成。

表2 剣道団体について

国内連盟設立年数 ^{*1}	全日本剣道連盟1952年設立
国際連盟設立年数 ^{*2}	国際剣道連盟 (IKF= International Kendo Federation) 1970年設立国際剣道連盟 (FIK) に2006年改名
国際連盟加盟国数 ^{*3}	47ヶ国
国際スポーツ団体総連合加盟の有無 ^{*4}	加盟
団体理念等 ^{*5}	理念: 「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」 剣道修練の心構え: 剣道を正しく真剣に学び心身を錬磨して旺盛なる気力を養い剣道の特性を通じて礼節をととび信義を重んじ誠を尽くして常に自己の修養に努め以って国家社会を愛して広く人類の平和繁栄に寄与せんとするものである 剣道指導の心構え: 竹刀の本意 剣道の正しい伝承と発展のために、剣の理法に基づく竹刀の扱い方の指導に努める。 礼法 相手の人格を尊重し、心豊かな人間の育成のために礼法を重んずる指導に努める。 生涯剣道 とともに剣道を学び、安全・健康に留意しつつ、生涯にわたる人間形成の道を見出す指導に努める。

表2 資料出所: ^{*1}は杉山 (2002), ^{*2}は、財団法人全日本剣道連盟公式ホームページ「全日本剣道連盟のご紹介 (国際剣道連盟)」, ^{*3}は FIK 公式ホームページ「What is FIK」, ^{*4}は GAISEF 公式ホームページ「Members」, ^{*5}は剣道講習会資料 (2007) を参考にして筆者が作成。

^{註1})GAISF (General Association of International Sports Federation) は日本語では国際スポーツ団体総連合、または国際競技連盟連合と訳される。1967年発足し、本部はモナコのモンテカルロにある。³⁷⁾

である。

表3 空手道団体について

国内連盟設立年数 ^{*1}	全日本空手道連盟1964年設立
国際連盟設立年数 ^{*2}	世界空手道連合 (WUKO=World Union of Karate Organization) 1970年設立 世界空手道連盟 (WKF=World Karate Federation) に改名, 1993年設立
国際連盟加盟国数 ^{*3}	175ヶ国
国際スポーツ団体総連合加盟の有無 ^{*4}	加盟
団体理念等 ^{*5}	理念: 「徒手空拳で身を護る術から修行を経て, 人間力の向上を目的とする。」

表3 資料出所: ^{*1}は田中ら (2000), ^{*2}は財団法人日本武道館 (2002) 「月刊武道 8月号」, ^{*3}は WKF 公式ホームページ「トップページ」, ^{*4}は GAISEF 公式ホームページ「Members」, ^{*5}は財団法人全日本空手道連盟のメール問い合わせを参考にして筆者が作成。

表4 少林寺拳法団体について

国内連盟設立年数 ^{*1}	全日本少林寺拳法連盟 1957年設立社団法人日本 少林寺拳法連盟に改名, 1963年設立財団法人少林 寺拳法連盟に改名, 1992 年設立
国際連盟設立年数 ^{*2}	国際少林寺拳法連盟 (ISKF=International Shourinji kempo Federation) 1972 年設立少林寺拳法国際連 合 (WSKO=World Shorinji Kempo Organization) に 改名, 1974年設立
国際連盟加盟国数 ^{*3}	33ヶ国
国際スポーツ団体総連合加盟の有無 ^{*4}	未加盟
団体理念等 ^{*5}	理念: 「半ばは自己の幸 せを半ばは他人の 幸せを」

表4 資料出所: ^{*1, 2, 5}は全日本少林寺拳法連盟公式ホームページ「少林寺拳法とは? (創始の動機と目的)」, 「少林寺拳法とは? (60年の歩み)」, ^{*3}は WSKO 公式ホームページ「List of Federations and Branches」, ^{*4}は GAISEF 公式ホームページ「Members」を参考にして筆者が作成。

表5 相撲団体について

国内連盟設立年数 ^{*1}	日本相撲連盟1946年設立
国際連盟設立年数 ^{*2}	国際相撲連盟 (ISF=International Sumo Federation) 1992年設立
国際連盟加盟国数 ^{*3}	86ヶ国加盟
国際スポーツ団体総連合加盟の有無 ^{*4}	加盟
団体理念等 ^{*5}	心すべき事項: 修練によって心・技・体の向上と完成につとめ, 広く教養と豊かな情操を身につけ, 洗練された国際社会人となって, 人類社会に奉仕する精神を養う。

表5 資料出所: ^{*1, 2}は杉山 (2002), ^{*3}は財団法人日本武道館 (2006) 「月刊武道 6月号」, ^{*4}は GAISEF 公式ホームページ「Members」, ^{*5}は財団法人日本相撲連盟公式ホームページ「トップページ」を参考にして筆者が作成。

表6 なぎなた団体について

国内連盟設立年数 ^{*1}	全日本なぎなた連盟1955年設立
国際連盟設立年数 ^{*2}	国際なぎなた連盟 (INF=International Naginata Federation) 1990年設立
国際連盟加盟国数 ^{*3}	11ヶ国
国際スポーツ団体総連合加盟の有無 ^{*4}	未加盟
団体理念等 ^{*5}	理念: 「なぎなたは, なぎなたの修練により, 心身ともに調和のとれた人材を育成する。」 指導方針: なぎなたの正しい指導により技を練り, 心を磨き, 気力を高め, 体力を養うとともに, なぎなたの特性の中に生きる日本のすぐれた伝統を守り, 規律に従い, 礼譲を尊び, 信義を重んじ, 毅然として広く平和な社会に役立つ人を養う。

表6 資料出所: ^{*1}は杉山 (2002), ^{*2}は財団法人全日本なぎなた連盟 (1991) 「なぎなた50号」, ^{*3}は INF 公式ホームページ「トップページ」, ^{*4}は GAISEF 公式ホームページ「Members」, ^{*5}は財団法人全日本なぎなた連盟 (2001) 「なぎなたハンドブック (学科問題解説)」を参考にして筆者が作成。

表7 弓道団体について

国内連盟設立年数 ^{*1}	全日本弓道連盟1949年設立
国際連盟設立年数 ^{*2}	国際弓道連盟 (IKYF=International Kyudo Federation) 2006年設立
国際連盟加盟国数 ^{*3}	17ヶ国
国際スポーツ団体総連合加盟の有無 ^{*4}	未加盟
団体理念等 ^{*5}	<p>最高目標：「真・善・美」 「真」とは「弓に誤魔化しは通じない」ということである。矢は正しく狙った的に真っ直ぐに飛ぶからの中にも偽りはない。偽りのない射はどのようにあるべきか、真実を採求しなければならない。一射ごとにこの「真」をもとめてゆくのが弓道(求道)の「みち」である。</p> <p>「善」とは弓道の倫理、すなわち礼とか「不争」とかは静かな心境のことであり、心的態度が「平常心」を失わないことが重要である。弓によって互いに親しみ、弓によって協同し、和平であること。心的にも平静を失わない境地が必要な条件であり現代の弓道の特性である。</p> <p>そして「真なるもの」は美しく、「善なるもの」も美しい。これを具体的に表現しようとする射礼もその一つである。</p>

表7資料出所：*1は杉山(2002)、*2、*3は財団法人全日本弓道連盟(2006)「弓道6月号」、*4はGAISEF公式ホームページ「Members」、*5は財団法人全日本弓道連盟公式ホームページ「弓道の世界(弓道とは)」を参考にして筆者が作成。

2. 武道のスポーツ化傾向

1に著した様に、ほとんどの武道は国際連盟を設立し、国際化にむけて前進しているといえる。柔道の国際連盟加盟国数においては他の武道よりも群を抜いており、もはや柔道ではなく、JUDOとなったといえるのではないだろうか。ここでは早い段階で国際化が進んでいた、柔道と剣道におけるのスポーツ化傾向について述べる。

1) 柔道のスポーツ化傾向

現在、柔道では2つのルールが存在する。ひとつが「講道館柔道試合審判規定」(以下講道館ルール)で、もうひとつが「国際柔道試合審判規定」(以下国際ルール)である。

講道館ルールが制定されたのは1900年で、講道館柔道創立から18年後となっている。その後何度か改正されるが、現在の講道館ルールは、第二次世界大戦後の1951年に改正された規定が骨格となっている(竹内2002¹⁹⁾, pp.2-3)。

第1回世界選手権大会から東京オリンピックと、第4回世界選手権までの約10年間は講道館ルールが採用されていたが、その後1967年のアメリカで行われた第5回世界柔道選手権では国際ルールが採用されることになったとされている(竹内2002¹⁹⁾, pp.12-13)。

その後講道館ルール、国際ルール共に何度も改正され、現在の日本では国際ルールと、講道館ルールが併用されるようになる。全日本柔道連盟主催の大会で講道館ルールが採用されているのは、全日本選手権と国民体育大会のみとなっている。

以下は主な柔道の変容である。

① 階級制の導入

1961年にドイツ、アメリカによって平等を理由に唱えられ、階級制が導入された。このとき日本は、「柔よく剛を制す」の基本理念に違反するとして反対し、決議の結果採用された。1961年に4階級制、1967年に6階級制、1977年に8階級制、1991年に7階級制が採用されて現在に至る。

表8, 9はオリンピックと世界柔道選手権大会における階級の変遷である。

国際化が進むにつれ階級が増え、体重の上限も上がっていることがわかる。1980年代中盤からは、無差別級を除くと7階級の区分が定着している。その後選手の体格向上に合わせて、区分は多少変化した。

そして階級制度で切り離せない事柄は、無差別級の問題である。現在オリンピックにおいて、無

表 8 オリンピックの階級変遷

年	階級	階級区分							
1964	4 階級 男子	-68kg	-80kg	-93kg	無差別				
1972	6 階級 男子	-63kg	-70kg	-80kg	-93kg	+93kg	無差別		
1974									
1980	8 階級 男子	-60kg	-65kg	-71kg	-78kg	-86kg	-95kg	+95kg	無差別
1984									
1988	7 階級 男子	-60kg	-65kg	-71kg	-78kg	-86kg	-95kg	+95kg	
1992	7 階級 男子	-60kg	-65kg	-71kg	-78kg	-86kg	-95kg	+95kg	
1994									
1998									
1998	7 階級 女子	-48kg	-52kg	-56kg	-61kg	-66kg	-72kg	+72kg	
2000	7 階級 男子	-60kg	-66kg	-73kg	-81kg	-90kg	-100kg	+100kg	
2004									
2004	7 階級 女子	-48kg	-52kg	-57kg	-63kg	-70kg	-78kg	+78kg	

表 8 資料出所：尾形ら（1998，p.218）を参考に筆者が作成。

表 9 世界選手権大会の階級変遷

年	階級	階級区分							
1956	1 階級	無差別							
1958									
1961									
1965	4 階級 男子	-68kg	-80kg	+80kg	無差別				
1967	6 階級 男子	-63kg	-73kg	-80kg	-93kg	+93kg	無差別		
1969									
1971									
1973									
1975									
1979	8 階級 男子	-60kg	-65kg	-71kg	-78kg	-86kg	-94kg	+93kg	無差別
1981									
1983									
1985									
1980	8 階級 女子	-48kg	-52kg	-56kg	-61kg	-66kg	-72kg	+72kg	男子 無差別
1982									
1984									
1987	8 階級 男子	-60kg	-65kg	-71kg	-78kg	-86kg	-95kg	+95kg	無差別
1989									
1991									
1993									
1995									
1997									
1999	8 階級 男子	-60kg	-66kg	-73kg	-81kg	-90kg	-100kg	+100kg	無差別
2001									
2003									
2005									
2007									
2007	8 階級 女子	-48kg	-52kg	-57kg	-63kg	-70kg	-78kg	+78kg	

註2) 1980年から1984年の世界選手権大会は、1年おきに男女交互に行われている。1987年からは2年おきに男女同時に開催されるようになった。

表 9 資料出所：尾形ら（1998，p.218）を参考に筆者が作成。

差別級は行われていない。1992年のソウル大会にて女子がオリンピック種目となり階級が増えたために、廃止されてしまったのである。現在世界レベルの大会において無差別級は、世界柔道選手権大会のみとなっている。

② 技の分類や採用

国際ルールと講道館ルールでは、技の分類が異なる。例に挙げると「帯取返」という技は国際ルールでは投技に分類されるが、講道館ルールでは「引込返」として真捨身技に分類される。同じような例として、講道館ルールでは横捨身技である「河津掛」「蟹挟」、絞技である「胴絞」、関節技である「足絡」は、国際ルールでは禁止技で分類される。しかし分類上の問題で「河津掛」「胴絞」「足絡」は講道館ルールでも禁止技となり、「蟹挟」もほとんどの試合で禁止技とされる。これらは国際ルールでは分類上に「禁止技」という項目を作ったために、このようになったと思われる。

また国際ルールでは「小内巻込」となるが、講道館ルールでは「小内刈」に含まれる技だとされる。「後袈裟固」も、講道館ルールでは「崩袈裟固」に含まれる。これは、「小内刈」や「崩袈裟固」が発展、変化し、それに伴い、技を分化させ

たとえられる。

「浮固」は国際ルールのみ、有効な技であるとされる。抑込は「相手と自分の胸がおおむね合った状態」と規定されており、この規定の見解の違いから講道館ルールでは「浮固」を認めていない。

③ 国際ルールの改正

・ 「効果」の採用

国際ルールが1974年に改正され、1976年モントリオールオリンピック大会にて、ポイントの「効果」が採用される。

・ カラー柔道衣

カラー柔道衣の採用は我々日本人にとって、1番最初の衝撃的なルール改正であった。表10はカラー柔道衣採用の背景、表11はカラー柔道衣採用における主張である。

現在カラー柔道衣はIJF主催の国際大会（オリンピック、世界選手権、世界ジュニア選手権、ワールドカップ国別対抗大会）で、一方の選手のブルー柔道衣着用が義務付けられている。日本においては伝統を重んじるため、柔道衣は白で行われている。

表10 カラー柔道衣採用の背景

1986年10月	国際柔道連盟理事会にて、東京オリンピック無差別級優勝者のアントン・ヘーシク（オランダ）が青と白の柔道衣を提案。
1988年5月 9月	ヨーロッパ柔道選手権にて青の柔道衣が採用。 国際柔道連盟技術総会にて、欧州柔道連盟（EJF）がカラー柔道衣案を参考として提議。賛成33ヶ国、反対51ヶ国。）
1989年10月	国際柔道連盟総会にて、欧州柔道連盟（EJF）がカラー柔道衣案を初めて提議。賛成50ヶ国、反対87ヶ国で否決。
1991年7月	バゲナ国際柔道連盟会長がカラー化推進を表明。
1993年9月	国際柔道連盟総会にて、欧州柔道連盟（EJF）がカラー柔道衣案を再び提議。賛成52ヶ国、反対92ヶ国で否決。
1995年9月	国際柔道連盟に就任した朴（パク）会長が1997年の世界選手権からカラー柔道衣を導入することに強い意欲を示す。
1996年1月	欧州柔道連盟はヨーロッパでは今後カラー柔道衣を採用すると表明。
1996年3月	サマランチIOC会長は「カラー化を図らなければ、将来テレビやスポンサーの関係で難題に突き当たる可能性があることを指摘したい。」とカラー柔道衣導入が望ましいことを表明。
1997年10月	国際柔道連盟総会でカラー柔道衣採用が決定。賛成127ヶ国、反対38ヶ国。

表10資料出所：尾形ら（1998, pp.164-171）、田原（1998）、野瀬ら（2005）を参考にして筆者が作成。

表11 カラー柔道衣採用に関する主張

賛成派の主張	観客にわかりやすい。 審判員の誤審が少なくなる。 テレビ受けし、放映権料など連盟の収入アップにつながる。 オリンピック種目としての存続、発展のためになる。(オリンピック種目の中で柔道だけがユニフォームに色がない。)
反対派の主張	白い柔道衣に黒帯は、柔道の伝統的ユニフォームである。 試合に4着の柔道衣が必要となり、経済的負担が大きい。 色の心理的影響が考えられ、試合が平等でなくなる。

表11資料出所: 尾形ら (1998, pp.164-171), 田原 (1998), 野瀬ら (2005) を参考にして筆者が作成。

・ 抑え込みのポイント改正

1998年に抑え込み時間が以前より5秒短縮されることになった。30秒で一本ではなく、25秒で一本となる。試合展開を早くするためだと考えられる。

・ 女子の帯の白線廃止

1999年のバーミンガム世界選手権から、女子の黒帯の白線がなくなった。男女で帯の色を変えるのは良くないという理由からであった。日本国内の試合においては一般的に白線入りの黒帯を着用と規定されている。

・ ゴールデンスコア

2003年にIJF理事会にてゴールデンスコア方式の延長戦導入が決定した。試合者が同スコアの場合に行う延長戦のことで、どちらかが先に効果、または指導以上のポイントを取った時点で勝敗が決定される。延長戦は1回のみで、それでも勝敗が決定しない場合は、旗判定が行われる。

以上のように柔道はその時代においてルール等を重視し、世界のスポーツとして発展してきた。

2) 剣道のスポーツ化傾向

一方、剣道における競技化問題は、昭和初期の段階で起っていた (山中1993²⁵⁾, pp.30-32)。

昭和4年に天覧試合が行われようとした際、武道専門学校の主任教授の内藤高治が反対を示した

という。彼は勝ち負けにこだわる「勝負の剣道」ではなく、自分自身を作り上げていく「究極の剣道」を目指さなければならないという理想を持っていた。天覧試合が行われることにより、剣道が勝利主義的なものに変化してしまうと危惧したのである。しかし天皇陛下の命令であるということで、その意見は却下された。そのとき彼は、「日本剣道は滅んだ」という言葉を残し、その後に亡くなったとしている。

現在剣道では12月に第13回の世界大会を開催するに至るほど国際的普及が進んでいるが、剣道が柔道よりも国際化が進んでいないのは、昭和の早い段階でこのような出来事が起こり、競技化、スポーツ化に慎重になっているということが考えられる。

3. 武道の構造的特徴

武道は国際化していく上で考えていかなければならないのは、武道の芯の部分である。上辺だけのルールのみが国際化しても、それには何の意味もない。そこで武道の構造について考えてみる。

1) 内的構造

ほとんどの武道は理念や最高目標などといった形で、人間形成などの精神面を掲げている。人間にとって行動基準や判断基準となる精神の形は、とても重要であることがわかる。このような精神を育むものが武士道精神であり、今もっとも見直さなければならないものなのである。

武士道はもともと鎌倉武士の「戦いの掟」で、戦闘現場のフェアプレイ精神をうたったものである。それが平和な江戸時代に、歌舞伎、浄瑠璃などを通じて、町人、農民にまで行き渡り、日本人全体の行動規範となったとしている。それは戦後急速に廃れていってしまったが、その武士道精神を理念としているのが武道である。武士道は鎌倉時代以降、多くの日本人の行動基準、道徳基準として機能してきた。この中には慈愛、誠実、忍耐、正義、勇気、惻隠（他人の不幸への敏感さ）などが盛り込まれているのである（藤原2005¹⁾, pp. 116-129による）。

新渡戸稲造の「武士道」（1899¹³⁾）では、以上を含めた武士道精神「義・勇・仁・礼・誠・名誉・忠義」で表しており、以下のように要約される。

① 義

「義」とは、学問や技芸の道をきわめたことを意味する。名前よりも優れたものと考えられていた。そして父母、目上もしくは目下の者に対して負う「義務」のことである。「義」とは、武士道の光り輝く最高の支柱なのである。

② 勇

「勇」は勇気、勇敢、勇猛等を表す。これは義によって発動されなければ、価値のないものとされる。そしてこの勇気の精神的側面は落ちつきである。つまり、「勇気」は心のおだやかな平静さによってあらわされる。果敢な行為が勇気の動的表現であることに対して、これはその静的表現である。本当に「勇気」のある人は、常に落ち着いていて、けっして驚かされたりせず、何事によっても心の平静さを保っており、別の表現をすれば「余裕」と言われ、その人の大きさを示している。

③ 仁

「仁」とは、愛、寛容、他者への同情、憐みの情で、至高の徳であると説いている。これは高貴な精神の中でも王者らしい徳であり、王者にふさ

わしい徳である。

④ 礼

「礼」とは、他人に対する思いやりを表現することであると記されている。「礼」はその最高の姿として、愛に近いものである。長い苦難に耐え、親切で人をむやみに羨まず、自慢せず、思いあがらない。自己自身の利を求めず、容易に人に動かされず、およそ悪事というものをたくらまないものであるといえる。

またもっとも無駄のない立居振舞で、おくゆかしいものである。その優雅な作法は精神を統御させ、体内に力を蓄えさせるのである。

そして礼儀は慈愛と謙遜という動機から生じ、他人の感情に対する優しい気持ちにとってものごとを行うので、優美な感受性として表れる。

⑤ 誠

真の武士は「誠」に高い敬意を払うと記されている。嘘をつくことやごまかしは、等しく臆病とみなされたのである。

⑥ 名誉

「名誉」という感覚は、個人の尊厳とあざやかな価値の意識を含んでいる。「名誉」は武士階級の義務と特権を重んずるように、幼児の頃から教えこまれる侍の特色をなすものだった。また、若者が追求すべき目標は富や知識ではなく、「名誉」とされていた。それはこの世の中で「最高の善」として賞賛されていたのである。

⑦ 忠義

武士道とは、個人よりも国を重んじる。武士道においては一族の利害とその個人の成員の利害は、一体不可分であるとされている。

以上の武士道精神は、日本の道徳の中核といえる。しかし武道でも、武士道精神が失われつつある。現代日本人は再び、武士道精神を見直さなければならぬのではないかとさえ思える。新渡戸

表12 柔道ルネッサンスの取り組み，内容

主な活動項目* ¹	キャッチフレーズ スピーチ 都道府県柔道ルネッサンス 広報 中学校柔道の支援 女性プロジェクト 少年少女教育 障害者との交流支援
現在までの活動内容* ²	会場のクリーンアップ活動 大会でのスピーチによる啓発活動 大会プログラム，ポスター，横断幕等による啓発活動 講習会などでのパネルディスカッションによる啓発活動 (例：平成17年度全国中学校柔道大会での指導者講習会「中学校柔道を目指すもの」) 新潟県中越地震の被災者支援のための義援金活動(‘ガンパロウ新潟柔道フェスタ’)

表12資料出所：*¹は財団法人日本武道館(2007)「月刊武道9月号」，*²財団法人全日本柔道連盟公式ホームページを参考に筆者が作成。

稲造(1899¹³⁾)は、武士道の最高の美德として、「敗者への共感」「劣者への同情」「弱者へ同情」を挙げている。この武士道精神の中の惻隱の心を尊重するため、剣道においては、ガッツポーズをした選手は「一本取り消し」になる。これはルールで定められている事柄である。それに対し、柔道ではどうだろうか。2005年アテネオリンピックで日本人選手は大活躍をしたが、トップ選手たちの現状を挙げると、一本を取った途端に飛び跳ねて喜んだ選手もいれば、ガッツポーズを出した選手もいた。確かにルール上では、剣道のような規定はない。しかし惻隱の心は、どこへ行ってしまったのだろうか。オリンピックという世界最高峰の舞台でこのような光景が見られたことは、残念なことでもある。

その背景として、次々とルールが改正されてしまったことが挙げられる。ルールが商業主義的、勝利至上主義的になってしまったことが原因のひとつではないだろうか。国際化されJUDOとなってしまう以上、日本の意見はひとつの意見にしかならなかったのである。また、日本自体もこの内的構造について、次の世代にきちんと教育していかなかったことも原因のひとつかもしれない。今柔道界では、この内的構造、柔道の原点である

教育的価値が日本を含め、世界に根付いてないことが問題視されている。

嘉納師範は、競技としての柔道を積極的に奨励する一方、人間の道としての理想を掲げ、修行を通してその理想の実現を図れ、と生涯を懸けて説いた。柔道は21世紀を迎えた今現在、嘉納師範が提唱された柔道の原点に立ち返り、人間教育を重視した事業を進めようとしている。

講道館・全日本柔道連盟は、競技としての柔道の発展に努力を傾けることだけでなく、師範の理想とした人間教育を目指して、合同プロジェクト「柔道ルネッサンス」³¹⁾を立ち上げた。その主な目的は、組織的な人づくり・ボランティア活動の実施であり、本活動を通して、柔道のより総合的普及発展を図ろうとするものである。表12はその柔道ルネッサンスの主な活動内容等である。(表12)

現在最も国際化が進んだとされた柔道は、再び国際化を見直し、「柔道ルネッサンス」という活動を行っている。柔道以外の他の武道は、この柔道の回り道をしっかりと学び、慎重に真の国際化を図る必要があるのではないだろうか。

2) 外的構造

① 間合いと拍子, 気と読み

ほとんどの武道は, 人対人, 1対1の対人武道である。その対人武道において, 勝負の中で重要なものは何であろうか。まず他のスポーツと同様, 技術や, 体力などの要素が挙げられる。それに加え更に重要になってくるものは, 「間合いと拍子」「気と読み」である(時津1993²¹⁾, pp61-66)。

「間合い」とは相対する2人の間に生じるものであり, 「拍子」とはそこに生じる律動性, いわゆるリズムであるとされている。そしてそれらを総体的に支える「気」を媒介として, 相手を「読む」のである。技術や体力の勝負だけでなく, 「間合い」の詰め合い, 探り合い, 「拍子」の読み合い, 崩し合い, さらに「気」のぶつけ合い。そこにはつま先の動きから目線だけでなく, 空間をも越えた, 対人する2人にしかわからない, たくさんの勝負が行われているのである。それゆえに武道においては, 経験が重要になってくるとしている。

② 稽古

武道では一般的に「練習」のことを「稽古」と呼ぶ(杉山2002¹⁷⁾, pp34-39)。それは以下に要約される。

「稽古」は元来「古(いにしえ)を稽(かんがえ)る」と読み, 「昔の物事を考える」という意味を持つ言葉である。それが転じて, 学問することから, 武道や芸道などで修行, 練習することを意味するようになったとされている。武道では, 技の奥義は師から弟子に伝えられる。そこでは伝承を深く信じ, 先人を敬い, 謙虚に学ぶ姿勢が何よりも大切であった。故に武道の稽古法には「形」というものが存在し, これはスポーツには見られない独特のものである。「形」とは, 技を掛ける側と受ける側に別れ, 決められた手順とフォームで技を掛け, それを反復することによってその技の理合いを習得するものである。理想的なバランスとスピード, 呼吸法などを必要とし, 力やスピー

ドが重視されたものではない。また先人に敬意を表し, その技と心を習得し, さらに次に伝えていくのが重要とされている。

このような武芸の形式的な行為は, 一見面倒に思えるが慣れてくると, その行為に習熟することは無駄がない「理」にかなった動作であることがわかる。

この稽古を積む過程, すなわち順序を表す言葉に「守・破・離」がある。この言葉は芸道の世界で使われたのが始まりと言われている。「守」とは, 形より入る段階で, 師についてその流儀を習い, 守って励むことである。そして「破」とは, 師の流儀を極めた後に他流をも研究することである。最後に「離」とは, 自己の研究を集大成し, 独自の境地を拓いて, 一流を編み出すことである。嘉納師範が講道館柔道を創始した過程は, 正しくこの「守・破・離」が当てはまると言われている。

4. 生涯体育的特徴(老いて尚強し)

現在, 近代医学やコーチ学の進歩に伴い, 選手年齢は確実に高くなっている。柔道界では野村忠宏選手が北京オリンピックにて4連覇を¹¹⁾, 谷亮子選手がママさんメダリストを目指す¹²⁾ という意思表示をした。

剣道において「老いて尚強し」というのは存在する。剣道の世界では今も尚, 高段者の方が20代30代の若手に直接稽古をつけているのが常であり, 代表的なものは, 昭和における故持田盛二範士十段や故中倉清範士九段の立合稽古である。近年では第50回全日本剣道選手権大会記念演武としての谷口安則範士九段の模範稽古である。その際谷口氏は80歳を超える年齢であるにもかかわらず, 全日本クラスの現役選手や日本を代表する八段位を持つ方々を相手に圧倒的な強さを見せ付けた。これこそまさに「老いて尚強し」そのものであるといえよう。

そこで実際に「老いて尚強し」を証言出来るような高齢者が出場できる主な大会を, 武道を代表して柔道と剣道についてまとめた。

1) 柔道

① 全国高段者大会

全国高段者大会は年に1度講道館にて，開催される。段位別によってエントリーが設けられており，時間は3分に定められている。トーナメント方式の試合ではなく，1試合から2試合の個人試合である。

柔道新聞⁹⁾によると，平成18年4月28日の大会では，昨年17年度大会よりも60名多い1158名が出場し，最年長は内田櫛八7段（93歳）であった。また連続出場という記録では，30回が4名，20回連続出場は16名，10回は42名であった。

また九州高段者大会などのブロックレベルの大会や各県の高段者大会も行われている。

② マスターズ大会

日本マスターズ柔道協会公式ホームページ¹⁰⁾によると，マスターズ柔道大会は1998年の世界マスターズ大会で参加しようという気運になり，1999年に第1回の世界選手権がカナダの Welland で行われたとされている。第2回が2000年にカナダの Sydneyで行われ，その際に事務局が立ち上がり，それ以後の大会から世界マスターズ柔道協会のもとで行われるようになった。

世界マスターズ柔道選手権大会は，他のマスターズ競技と同様，国や組織を代表するものでなく，あくまで個人が自分の責任で参加するのが特長である。性別，年齢別，体重別の各クラスの競技試合と，年齢，体重に関係のない形の競技が行われている。

日本でも選手権大会を毎年開催しようという気運が高まり，第1回日本マスターズ柔道大会を2004年に静岡県にて，日本マスターズ柔道協会主催で開催された。またこの大会は，1～3位まで順位を争う大会である。

2) 剣道

① 全日本剣道演武大会

剣道では毎年「全日本剣道演武大会」が行われ

る。第99回全日本剣道演武大会プログラム³⁴⁾によると，第1回武徳祭大演武会は，武徳会創立直後の明治28年10月26日，大日本武徳会本部主催により開催された。その後，明治32年5月4日から新たに武徳殿が主会場となり，以来毎年実施されている。戦後，全日本剣道連盟が結成されてからは，京都大会の名称で昭和28年5月4日，旧大日本武徳会武徳殿において開催される。

以来，各種武道形・杖道・居合道の演武及び剣道個人試合が行われ，全国の剣道人が一年間の修練の成果を披露する演武大会として，また全国の剣道修行者の交歓の場として普及し今日に至る。平成18年4月に行われた大会では102回目を迎え，今では海外からの選手の参加も見られるほどである。

ここで明確にすべきことは，「老いて尚強し」の真の意味である。この「強い」というのは，試合ではなく，精神的な強さであると考え。武道の目的は，試合に勝つことではない。勝ちたいと思う気持ちや向上心は，武道においてとても大切ではあるが，それはあくまで結果論である。武道の目的は人間形成であり，人間形成に終わりはないので，武道は一生涯のものであると考える。厳しい道を老いても続けてきた時間と経験こそが，本当に「強い」証なのではないだろうか。

これこそ生涯スポーツならぬ，生涯武道なのである。

IV. おわりに

国際連盟設立年数や加盟国数などの比較から考えても，柔道は数ある武道の中でも，最も国際化が進んだ競技であるといえる。その理由として，創始者である嘉納治五郎が柔道創始の早い段階で，国際普及を目標としていたことが挙げられる。

理念に掲げてある「精力善用・自他共栄」は，「己の完成」「世の補益」という教育面を目的とするものであった。「精力善用」とは「精力最善活用」の略で，目的を達成するために心身の力を最も有効に活用することである。また「自他共栄」は，精力善用と共に宣言された柔道の根本原理で，

正確には「相助相譲自他共栄」という。自己の「栄え」のみを目的とせず、助け合い、譲り合い、融和協調して共に栄えることを目指すことである。「精力善用」と「自他共栄」は、互いに関連しあった原理であり、一方を欠くと不完全となる。この考え方は世界に通用し、万人に受け入れられるという嘉納師範の考えにより、柔道は急速に発展したと考えられる。そしていち早く国際化した柔道は、多くの国による様々な意見で変容をとげた。このような変容は、商業主義的、勝利主義的であるといえる。これは柔道の根本精神にとって“功”であるのか、それとも“罪”であるのか。

競技的側面から見れば、スポーツ化によるルール上の変容そのものは悪いことではないと考える。国際化を掲げる以上、変容は仕方ないことである。多くの人種や民族が集まれば、日本人では考え付かないような意見が出てくるのは当然である。柔道が世界中の人々に愛されているからこそ、より良いものにしようと、多くの意見が出てくるのである。

階級制だが、これが功でもあり、罪でもある。階級制導入によって、様々な体型の人たちに平等なチャンスが与えられた。身体の小さな人にも柔道の楽しさを伝えることが出来たのではないだろうか。発展途上国の小柄な柔道家にも、平等なチャンスが生まれたのである。しかしながら、無差別級の問題はどうだろうか。無差別級は「柔能く剛を制す」を表現するにもっとも適した場である。しかしながらその無差別級は、オリンピックという大きな舞台では見られない。平等という点でオリンピックでは女性種目の追加に、皮肉にも無差別級を削除することになったのである。

そしてカラー柔道衣の導入は当初は幾分か問題視された面もあるが、大衆性、見やすさ、国際化という点で、導入後数年経た結果、功ではないかと考える。誤審を防ぐことに繋がり、ルール上では効果的である。しかし、経済面では負担が大きくなるので、今後考えていかなければならない課題のひとつではないだろうか。

柔道の変容は悪いことではない。これは、柔道の進化なのである。諸外国の意見を取り入れ、柔道がより親しまれ、大きく成長していくことは悪いことではないと考える。ただ、原点を忘れてはならないのである。今問題なのは、柔道の原点を諸外国に伝えられているかということなのである。またそれだけでなく、日本人自らも原点を忘れていないか、ということなのである。

今、社会においても日本の伝統文化が見直されている。武道を見習った動きは、スポーツでも見られ、日本サッカー協会では「JFA2005宣言」というものが作られた。これは「サッカーを通じて豊かなスポーツ文化を創造し、人々の心身の健全な発達と社会の発展に貢献する。²⁹⁾」という理念を実現するために作られたサッカー普及と強化のための目的である。これは武道の人間形成を見習った動きではないだろうか。

また武道では道場に入る際に、礼をする。これは近年、スポーツ界でも見られる。野球選手がグラウンドに入る際に礼、バスケットボール選手がコートに入る前に礼をする。これも武道を見習った動きの一つだと考えられる。

今重要なことは、新しいことばかりにとらわれず過去と向き合うことである。初心は忘れてはならないのだ。柔道は今、回り道をしながら、「柔道ルネッサンス」などの活動を通し、真の国際化を目指している。ただ単に強さを求めるのではなく、武道の内的構造を理解し、さらに進化しようとしているのである。他の武道はこの柔道の歴史を見習い、国際化、スポーツ化に慎重に動いていかなければならない。

参考・引用文献一覧

- 1) 藤原正彦 (2005) 国家の品格, 新潮社: 東京.
- 2) GAISF General Association of International Sports Federation 公式ホームページ「Members」, <http://www.agfisonline.com/vsite/vnavsite/page/directory/0,10853,5148-176060-193278-nav-list,00.html>.
- 3) International Kendo Federation 公式ホームページ, 「What is FIK」, <http://www.kendo-fik.org/english-page/english-page2/What-is-IKF.htm>.

- 4) International Naginata Federation 公式ホームページ「トップページ」, <http://www.naginata.org/inf/inf.html>.
- 5) 講道館 (2007) 月刊柔道11月号. : p.57.
- 6) 講道館, 財団法人全日本柔道連盟 (2001) 講道館柔道試合審判規定<取り扱い統一事項> (平成13年6月4日改正). 講道館: 東京.
- 7) 文部科学省 (2006) パンフレット「新しい教育基本法について」.
- 8) 永木耕介, 山崎俊輔 (2005) 柔道の教育的価値に関する国際比較研究 日米豪仏の練習者を対象にして. 武道学研究38 (1): 37-50.
- 9) 日本柔道新聞社 (2006) 柔道新聞. 5月20日発行, 第1605号: 東京.
- 10) 日本マスターズ柔道協会公式ホームページ, 「トップページ」 <http://jamja.hp.infoseek.co.jp/>.
- 11) 日刊スポーツ新聞 (2006) 3月5日発行, 第11面.
- 12) 日刊スポーツ新聞 (2007) 9月18日発行, 第1面.
- 13) 新渡戸稲造, 奈良本辰也訳 (2006) 武士道 - サムライはなぜ, これほど強い精神力をもてたのか? -. 三笠書房: 東京.
- 14) 野瀬清喜, 明先俊太郎, 野瀬英豪, 三宅仁, 鈴木若菜 (2005) 柔道の国際化と日本柔道の今後の課題 (第四報) 国際柔道連盟試合審判規定と講道館柔道試合審判規定の比較を中心に. 埼玉大学紀要54 (1): 249-257.
- 15) 尾形敬史, 小俣幸嗣, 鮫島元成, 菅波盛雄 (1998) 競技柔道の国際化 - カラー柔道衣までの40年 -. 不昧堂出版: 東京.
- 16) 下川美佳 (2005) 武道の特性 - 理念とルールより -. 鹿屋体育大学大学院体育学研究科修士論文.
- 17) 杉山重利編著 (2002) 武道論十五講. 不昧堂出版: 東京.
- 18) 田原伸二 (1998) カラー柔道衣問題についての一考察. 早稲田大学卒業論文.
- 19) 竹内義徳 (監修) (2004) 柔道のルールと審判法2004年度版. 大修館書店: 東京.
- 20) 田中守, 藤堂良明, 東憲一, 村田直樹 (2000) 武道を知る. 不昧堂出版: 東京.
- 21) 時津賢児 (1993) 武道の方法叙説. 壮神社: 東京.
- 22) WORLD KARATE FEDERATION 公式ホームページ「トップページ」, <http://www.wkf.net/>.
- 23) World Syorinji Kempo Organization 公式ホームページ「List of Federations and Branches」, <http://www.shorinjikempo.or.jp/wsko/list/index.html>.
- 24) 山口香, 木村昌彦, 中村一成, 出口達也, 柳沢久 (2002) 講道館柔道の理念と修行者の理解としての一考察. 武蔵大学人文学会雑誌34 (2): 59-78.
- 25) 山中秀夫 (1993) 滅びゆく現代剣道 このままで
は剣道界の明日はない, 日本出版放送企画: 東京.
- 26) 財団法人日本武道館 (2002) 月刊武道8月号. ベースボールマガジン社: 東京, p.84.
- 27) 財団法人日本武道館 (2006) 月刊武道6月号. ベースボールマガジン社: 東京, p.5.
- 28) 財団法人日本武道館 (2007) 月刊武道9月号. ベースボールマガジン社: 東京, p.123.
- 29) 財団法人日本サッカー協会 (2007) JFA news. 2月情報号, p.18.
- 30) 財団法人日本相撲連盟公式ホームページ「トップページ」, <http://www.nihonsumo-renmei.jp/index.html>.
- 31) 財団法人全日本柔道連盟公式ホームページ「柔道ルネッサンス」, <http://www.judo.or.jp/>.
- 32) 財団法人全日本柔道連盟 (2004) 国際柔道連盟試合審判規定2003年4月14日施行 (2003年IJF理事会決定). 財団法人全日本柔道連盟: 東京.
- 33) 財団法人全日本空手道連盟メール問い合わせ.
- 34) 財団法人全日本剣道連盟 (2003) 第99回全日本剣道演武大会プログラム. p.1.
- 35) 財団法人全日本剣道連盟 (2002) 剣道時代4月号. 体育とスポーツ新聞社: 東京, pp.94-97.
- 36) 財団法人全日本剣道連盟 (2002) 剣道時代5月号. 体育とスポーツ新聞社: 東京, pp.94-97.
- 37) 財団法人全日本剣道連盟 (2006) 剣道時代6月号. 体育とスポーツ新聞社: 東京, p.130.
- 38) 財団法人全日本剣道連盟 (2007) 剣道講習会資料 (平成19年度版).
- 39) 財団法人全日本剣道連盟公式ホームページ「全日本剣道連盟のご紹介 (国際剣道連盟)」, <http://www.kendo.or.jp/misc/international.html>.
- 40) 財団法人全日本弓道連盟 (2006) 弓道6月号. 財団法人全日本弓道連盟: 東京, pp.4-5.
- 41) 財団法人全日本弓道連盟公式ホームページ「弓道の世界 (弓道とは)」, <http://www.kyudo.jp/sekai/index.html>.
- 42) 財団法人全日本なぎなた連盟 (1991) なぎなた50号. 財団法人全日本なぎなた連盟: 兵庫, p.10.
- 43) 財団法人全日本なぎなた連盟 (2001) なぎなたハンドブック (学科問題解説). 財団法人全日本なぎなた連盟: 兵庫, p.3.
- 44) 財団法人全日本少林寺拳法連盟公式サイト「少林寺拳法とは? (創始の動機と目的)」, <http://www.shorinjikempo.or.jp/about/initiation.html>
「少林寺拳法とは? (60年の歩み)」, <http://www.shorinjikempo.or.jp/about/history.html>.

